

人間科学データ国際比較研究

近年、人文社会科学の領域では、国際比較研究の重要性が広く認識されるようになってきました。異なる社会を比較することによって、人びとの行動や態度、意識に与える制度や文化の影響を捉えることができるからです。

データ・アーカイブの整備により、国際比較研究は以前よりもずっと容易になりました。しかし、国際比較研究を実践する際には、データの入手や加工の方法、調査項目の比較可能性、分析結果の解釈などに関して、特殊なノウハウやテクニックが必要となります。今回は、そのためのノウハウやテクニックを身につけることを目的とし、4名の先生による講演と実習を行います。

場所：人間科学研究科本館1階プレゼンテーションルーム

2月10日（水） 2～5限

有田 伸 氏（東京大学社会科学研究所・准教授）

「背景条件を考慮した東アジア比較社会研究」

2月15日（月） 2～5限

三輪 哲 氏（東北大学・准教授）

「国際比較のための多水準分析」

2月16日（火） 2～5限

田辺 俊介 氏（東京大学社会科学研究所・准教授）

「社会調査データの国際比較研究

—二次分析の利点と欠点—

2月17日（水） 2～4限

吉野 諒三 氏（統計数理研究所・教授）

「国際比較調査の方法と実際」

このセミナーは、大学院授業科目「人間科学データ国際比較研究」を公開するものです。履修登録をしていなくても、どなたでも参加していただけます。また、各回で完結した内容であるため、1回のみ参加ということでもかまいません。人数に限りがあるため、参加を希望される方は人間科学研究科・教育研究推進室（北館305室：06-6879-4035）までご連絡ください。

「背景条件を考慮した東アジア比較社会研究」(有田伸氏)

日本、韓国、台湾などの東アジア社会は、産業化や教育拡大のパターンが大きく類似していると同時に、雇用慣行をはじめとする制度的条件の面ではさまざまな重要な相違が存在している。この授業では、これらの類似点と相違点を十分に意識しながら、より適切で実りある東アジア比較社会研究を行うための方法と留意点について検討していく。

「国際比較のための多水準分析」(三輪哲氏)

近年、社会科学において、多水準分析 (multilevel analysis) を応用する研究が増加している。とりわけ計量的な国際比較研究に関しては、今や、多水準分析が標準的な方法となりつつある。この授業では、既存データの分析実習を中心に、多水準分析を用いる国際比較分析の基本的考え方および実践的スキルの習得を目標とする。なお、統計ソフトウェアとして、SPSS、HLM を使用する。

注意事項：実習で用いるデータは、講師が当日に配布する。ソフトウェア HLM に関する予備知識は特に要さない (SPSS の知識はあることが望ましい)。

「社会調査データの国際比較研究—二次分析の利点と欠点」(田辺俊介氏)

国際社会調査データの二次分析の事例を挙げながら、二次分析データによる国際比較研究の利点や欠点について、受講者とも議論を混ぜつつ論じる。具体的には国際社会調査プログラム (ISSP) のナショナル・アイデンティティ調査のデータを用いた分析を取り上げつつ、データの取得方法やハンドリング方法、あるいは分析方法や分析の注意点を述べていく。

「国際比較調査の方法と実際」(吉野諒三氏)

東アジア価値観国際比較調査及びアジア・太平洋価値観を題材に、国際比較の方法論と国際比較調査の実際について議論する。

参考文献：

1. 吉野諒三、2001、『心を測る—個と集団の意識の科学—』朝倉書店。
2. A. インケレス著 (吉野諒三訳)、2003、『国民性論—精神社会的展望—』出光書店。(ただし、付記「日本における国民性研究」は吉野原著)
3. 吉野諒三・千野直仁・山岸候彦、2007、『数理心理学—心理表現の論理と実際—』培風館。
4. 吉野諒三編、2007、『東アジア国民性比較 データ科学』勉誠出版。

